コメントへのリプライ

金　　學　載
（ソウル大学校統一平和研究院HK教授）

貴重なコメントをくださった武者小路先生と鄭祐宗先生に感謝するとともに、週末の遅い時間まで残ってくださった、聴衆の皆さんに尊敬の意を表します。これまでいろいろな講演に参加してきましたが、今回の会は心に残る印象深いものになりそうです。

まず武者小路先生の質問からは多くのことを学ぶことができました。朝鮮の立場が重要であるということについては全面的に賛同します。また、北の内部におけるハト派とタカ派の問題を考えなければいけないということも大変勉強になりました。葛藤や制裁による圧力は、北側のタカ派だけではなく、米韓も同じくタカ派的な存在を利することになります。南北のみならず、米国、中国、日本においても、穏健派をいかに下支えするかということが、平和プロセスの構築において重要な問題となります。

北側の軍部は非核化から始まり統一へと向かうというプロセスについて、恐らく同意しないだろうという武者小路先生のご意見がありましたが、問題は米国が非核化を優先と考え、北側がその逆を考えているということです。

互いが両極の意見を持ったところでは交渉を始めることができないので、まずは中間的な折衷を行い、具体的なロードマップを広げていこうとしたのが韓国政府のやり方でした。２年前の2017年に比べると、朝米の差異はかなり縮まり、大分改善したように思います。依然として、朝米の関係と、今後交渉が無事に進んでいくかということについては不確実ですが、不確実だからこそ、韓国政府はその間に立って、いかに進めていくかということに苦心してきたのだと思います。

武者小路先生が主体思想から先軍思想、そして並進路線に至る過程についてご説明くださいましたが、金正恩政権に入ってからは、経済的に開放し、経済成長を優先する方針が明らかに見ることができます。そのような状況の中で、問題が少しずつ進んでいき、北側が経済成長し、安定的に事が進んでいくような状況が来るのではないかと思います。

２番目に、トランプが新冷戦体制を準備しているということで、バンドン会議や非同盟主義が重要であるとおっしゃいましたが、冒頭に申し上げたとおり、第一次世界大戦のときにも同じような問題がありました。

朝鮮半島の周辺は、一般的な国々というよりも、世界的な超強大国に囲まれています。朝鮮半島において、日清戦争、日露戦争、そして朝鮮戦争という形で、超強大国間における戦争が行われてきました。

中米の間の戦争は、この先１世紀ぐらい朝鮮半島に悪い影響を与えるでしょうし、中国とインド

の競争も東アジアに対して50年ぐらいいろいろな影響を与えると思います。このようなとき問題となるのは、相対的に小さい国々です。例えば中国とインドに比べると、南北もそうですし、台湾と日本も相対的に小さい国となります。モンゴルや東南アジア、ベトナムに至る中間から小さい規模の国々は、今後、連帯を求められます。そのような意味で、新しい意味での非同盟、平和などの紐帯を今後小規模、中規模の国々で求めていかなければなりません。

３番目に、朝鮮半島の非核化と日本の問題についてお話ししてくださいました。南北間の問題というのは、単純に南北双方の話ではなくて、片方の関係がよくなればもう片方の関係が悪化するというゼロサム的な関係です。そういう意味で、東北アジアの国々は、互いに主権を尊重する多者協力体制が必要だと思います。

レーダーの問題をお話しいただきましたが、韓日における安全保障体制は非常に低い段階にあります。そして、ロシア、中国、米国のIMFの脱退と核競争的な状況は、平和にとって不安定なものです。そのため、衝突や葛藤に対して、それを抑止するような合意をつくることが、今非常に切実な課題だと思います。

最後に、ハイブリットとローカルのお話をしてくださいました。それについては同意しますが、それを克服していくような知恵を出していかなければいけないと思います。そのような過程で、バンドン会議というのは東洋的な性格を帯びていると言えますが、西洋で見習えることがあれば、それを積極的に取り入れていかなければなりません。

次に鄭祐宗さんがご教授くださいました。お二人の興味深い話は大変勉強になりました。元山口県知事の田中龍夫については初めて知りましたが、大変植民地主義的な発想を持った人物だと思いました。植民地及び帝国主義というものは、共通して、宗主国にとっては平和ですが、植民地にされた当事者にとっては暴力であるということです。そうしたことを象徴する社会的帝国主義という言葉があります。それは自国の社会の問題を膨張を通じて解決するということを指しています。

入江啓四郎についても今回初めて知りましたが、非常に興味深い人物だと思います。南北の国は第二次世界大戦における戦犯ではないので、ドイツとは異なり、何か統一なりが行われようとしたときに、他国から邪魔をされる理由は本来ありません。ドイツは敗戦国だったため、統一をするときに周辺国からの同意を得なければなりませんでした。南北の場合は、他国から干渉を受ける必要はありませんでしたが、分断体制が規定しているのは、48年の分断と50年の戦争です。そのため、国際法的に非常に特異な位置になるので、多様な議論が必要になります。

45年以降の歴史についてどういうふうに考えるかについては、今後長く話していかなければいけません。ただ、平和条約なしに戦争を終結できるというジョージ・ケナンの言葉を聞いて、鄭祐宗さんが北側を無視、あるいは主体として認めないということをご指摘なさったのは非常に重要だと思います。それは相手を承認したいことを政策とするもので、これは冷戦体制の産物だと言えますが、今後は相手を承認した上での平和体制を構築していかなければなりません。

そして、分断の起源から統一の起源へと視点を変えていかなければいけないということについても積極的に同意します。鄭祐宗さんが準備してくださったコメントの中で、国際法の中に朝鮮がなかったというご指摘をしてくださったのですが、基本的に国際法というのはヨーロッパ中心主義的で植民地主義的な性格を強く持っていると思います。過去にも国際法についての批判的な見方は十分できると思います。

昨今の状況はさらに複雑です。西洋において掲げられた価値としての人権や民主主義や平和は、

単純に植民地主義の産物であるという理由だけでむげにできるかといえば、それは違うと思います。

当時認められることがなかった平和や人権というものを使って、逆にそういうものを承認させていくことが必要ですし、ローカルな次元でつくり上げてきた価値を、今後そうした方法を通じて追及していくことはできると思います。

最後に、複雑系に関する質問についてお話しします。いわゆる近代的な価値体系が導入される前の朝鮮では、大体500年間、朱子学的な体制、儒教的とも言いかえられる文化的な価値体系が存在しました。そうしたコンプレックス・システムが存在していましたが、日本の植民地を通じて、日本の価値体系がさらに編入されることになりました。

明治維新に関する研究でよくされてきたように、日本系というもの、プロシア系、英国系、そしてフランス系、アメリカ系の価値体系が混合される形で形成されました。そうした混合物としてのコンプレックス・システムが台湾や朝鮮、満州に導入されたと言えます。その後にロシア的なシステムとアメリカ的なシステムが入ってきました。

そうした状況を経て、南北において、北は北、南は南の独自的なシステムが形成されましたし、米ロ中日においても独自的なプロセスでそういうシステムが形成されたと言えます。そして、それは当然100％ロシアシステムとか、100％アメリカシステムということは言えず、そのため、十分双方に歴史的な共通点を探していくことができます。以上です。